

## 「運を消費する」という物語

村上幸史 大阪大学大学院人間科学研究科  
Koshi Murakami Graduate School of Human Sciences, Osaka University

### 要約

「幸運」や「不運」な結果について語る際に、しばしば「運」が資源のようなものとして扱われ表現される。しかし、このような表現が多用される割には、その内容は検討されていない。そのため「運」を資源のように扱う「運資源」的な記述が実際に用いられる状況と、その構造を物語的に分析することから、物語の面白さの側面を検討した。研究1では、懸賞における的中・不的中の記述から、その大半で「幸運」がネガティブなものとして描かれていることが分かった。続く研究2から研究4ではポジティブ（「残す」「増える」）－ネガティブ（「使う」「減る」）の両側面から自由記述が集められ分析された。その結果、ポジティブな記述がネガティブなものに比べて少ない理由として、ポジティブな記述の場合には、未来の結果予測がほとんどなされないために物語がハッピーエンドで完結している点にあることが分かった。以上のことから「運資源」物語の面白さは、「幸運」がネガティブに捉えられる側面にあると考えられる。その背景にはポジティブな結果に対して、「幸運」の妥当性という価値付けがなされると同時に、不確実な事象に対する視点の置き方の変化がある。加えて、妥当でない「運」の使い方に対して自己に責任が科されるという、因果応報的な「運やツキの正当化」に理由があると考えられる。

### キーワード

「運」、物語論、KJ法、努力、正当性

### Title

The Story of "Using up All One's Luck".

### Abstract

When we refer to lucky events and unfortunate events, we often talk as if "luck" is a type of resource. Although "luck" is often expressed in such a way, the matter of why it is referred to this way has not been considered. Therefore, by analyzing the circumstances that luck is approached as a "luck resource" and its structure in story form, the interesting points to the story were analyzed. In Study 1, most thought of "luck" as a negative factor when it came to winning or losing a prize. In Study 2 and 4, free descriptions were collected and analyzed by both sides, positive (increase in luck) and negative (decrease in luck). As a result, although positive descriptions were less than the negative descriptions, but when asked for the reason of the positive description, it was found that it was because the result could not be predicted, and there for resulting in a happy ending. In conclusion, what makes the story of "luck resource" is that "luck is considered as a negative factor. In context, "luck" is considered valid for positive results, perspective for an uncertain effect may be changed. Furthermore, as invalid use of "luck" may impose self-responsibility, there lies "justification of luck or tsuki" based on the retribution-view.

### Key words

"luck", story approach, KJ method, effort, justification

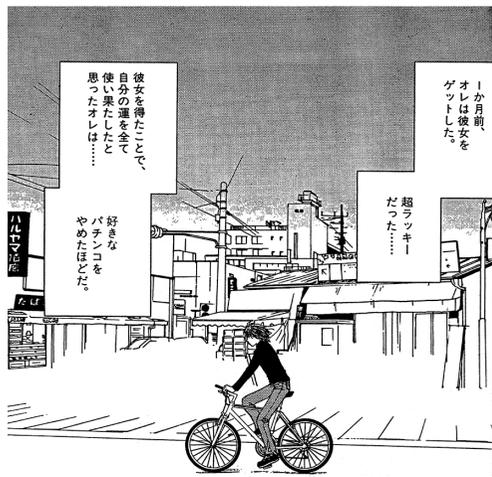


図1 ©波多野秀行（ビッグコミックスピリッツ，小学館，2001/11/26号，p.259，許可を得て転載）



図2 ©ホイチョイ・プロダクションズ（ビッグコミックスピリッツ，小学館，2002/01/01号，p.176，許可を得て転載）

**問題**

**マスメディアから提示される「運資源物語」**

図1はあるマンガの一コマである。一見，ごく普通の生活における一コマにも見える。しかし，ここで例として取りあげる理由は，登場人物が語る「運を全て使い果たした」という箇所にある。この表現は，登場人物が彼女を得た喜びの大きさを示す比喩表現かもしれない。

しかし，このような「運を使い果たした」とか「運が減った」のように，「運」が資源的に表現される場面は珍しくない。例えば，図2では「運が減少する」様子がゲージで表示されるなど，量的な側面が視覚的に描かれている。また新聞の記事などにも，「運資源」的な表現は，例えば「(100万円のパールネックレスをもらい) ズッシリときますね。ここで運を使っちゃったかもしれませんね。」(大阪スポーツ，2001/01/06)と取り上げられている。このほかにも多くのマスメディアから，「運」が資源のように扱われ

る姿が提示されている。

**「運資源物語」が語られる背景**

このように，方々で「運」が資源のように語られる背景には何があるのだろうか？ まず，考えられるのは「運資源」的な表現の基本形が定型としてあり，かつ誰にも理解しやすい内容になっている点である。つまり「運」を資源のように捉えるメタファーが，使いやすい形で普及している点である。

あるイメージが共有されていることを前提として初めて，面白さは成立すると指摘されている(尾中，1990)。このことから，メタファーとしての「運資源」が普及している可能性は高い。資源的なメタファーを示すものとしては，「使う」や「減る」，「貯める」，「残す」などの表現が挙げられる。

「運」の捉え方には多様性があり(村上，2002)，「運」自体が何であるかという真偽も明確に定義できないと考えられる。そのため，このような「運資源」的な表現によって語られる事象は，登場人物や状況が類似し，主人公である主体と用いられる事象の種類だけを変えた定型的なプロットを持つ物語の一節と見な

してよいだろう。

「運資源物語」は、一般的にはジョークとして通用している場合も少なくない。例えば、「これまで、シーズン以外の試合で、賞をもらったことがなかったんですよ。だから、お祭りの試合には弱いのかと思っていたんです。これで来年の運を使っちゃったかも。1年間に打てるヒット数は決まっていますからね。」(サンケイスポーツ, 1999/11/15, 波線は筆者による)といった、プロ野球の某選手のコメントが新聞記事になったものがある。

このコメントが記事になった理由の1つには、記事を書いた記者によって、波線部の「運を使ってしまった」と表現した部分が面白いと判断されたからではないかと推測される。もちろん表現の定型化によって、ジョークとは逆にワンパターンで、「運資源」的な表現は既に陳腐なものになっている可能性もある。

野球選手に限ることなく、例えばギャンブル好きで知られる作家の阿佐田哲也は自らの著作の中で、「とにかくその幸福の分だけ、あなたの運ははまうようになってるよ」(阿佐田, 1986)や「問題は、福引きで運を使ってしまおうか、もっと大事なところに運を集中させるかであろう」(阿佐田, 1989)のように「運資源」的な考え方を多数提示している。上に挙げた記事や書籍のように「運を使ってしまった」と語られた内容が、実際に活字化されたもの自体は、それほど多く見つからないかもしれない。しかし日常会話の中では数多く用いられているのではないかと推測される。

さらに、「運を使ってしまおう」といった語り口がしばしば観察されることは、多くの者が「運」を資源のようなものと捉えていることを反映していると考えられる村上(1995)は、こうした捉え方を態度尺度得点として測定しており、この態度が信念のように変化が少ないという、その持続性の点から、しろうと理論(lay theory)の一種として「運資源ビリーフ」と呼んでいる)。

先に挙げた野球選手の例では、某選手は冗談からこのような発言をしたのかもしれない。しかし、「運を使ってしまった」という考え方をを用いて、来年の成績をこの日の活躍と対比させて結び付けるかもしれない。さらに記事を書いた記者が「運資源ビリーフ」を持つからこそ、このコメントは記事になったのかもしれない

い。選手本人は、成績についての言い訳はしないかもしれないが、この記者や記事を読んだ読者が、来年の成績をこの日の活躍と対比させて結び付けるかもしれない。このように「運資源」的な捉え方は、因果の根拠として用いられている可能性が考えられる。

因果判断について心理学では、ワイナー(Weiner)に代表されるように、「運」は偶然に近い意味での外的な原因を帰属する要因として扱われてきた。その点では、「運資源」的な捉え方は、状況要因を個人の側の要因に帰属しやすいバイアス(Ross, 1977)の一種と見るべきかもしれない。また、想像されやすく、かつ因果推論に用いられやすい事象展開の典型的なシナリオ(カーネマン&ツヴァースキー(Kahneman & Tversky, 1982)はシミュレーション・ヒューリスティックと呼んでいる)として扱うべき問題かもしれない。

## 本研究の目的

だが、メタファーを援用したジョークとして用いられる場合であれ、ビリーフに基づいた実際の因果推論の根拠として用いられる場合であれ、「運」が資源のように捉えられている点は共通している。しかし、その話の描かれ方には相違点もある。すなわち、事象の「運」を消費した側面が語られる一方で、他方では「運」を貯めておく側面が語られたりしているように、「運」を資源として捉えるという共通項を持つ「運資源物語」だが、実際には様々な角度から描かれ、運用されている。どの状況で、どのような側面から描かれやすいのかについて、整理しておく必要があるだろう。

同時に、「運」が資源として語られる「運資源物語」では、「運」=資源という観点だけがクローズアップされる傾向がある。そして物語自体も断片的に用いられており、その構成も単純である。このために、なぜ「運資源物語」が方々で用いられるのか、あるいはその面白さは何に由来するのか、といった物語の背景要因の解明はあまりなされていない。この物語の面白さは、用いられやすさという機能面と関連しているだけではなく、個人の「幸運」観や「運」に関する概念の捉え方といった、いわば心理的側面とも結びついていると考えられる。

これらの背景要因は、実際に物語が用いられる状況

とその内容を分析し、核となる構造を取り出すことによって、探ることができるのではないかと考えられる。本研究は、いわば人々の事象の受け取り方や経験の語り方を、「運資源物語」に反映されたものから読み解こうとする試みである。「運」は偶然性を含む人間の行動と結びつけられやすい。そのため、このような機能面や心理的な側面を探るためには、主観的な必然性と偶然性の問題としての「運」に焦点を当てる必要があると考えられる。とりわけ「運」をこれまでの研究とは異なった形、「運」が物語として捉えられる文脈自体に注目することはその有効な手段であろう。

以上から、本研究は「運」が資源のような形で語られやすい状況に注目し、その事象と状況内容の分類を行う。研究1では、ある電子メールマガジン読者の意見が紹介された記述を主な例として取り上げ、記述中に示された「運資源」的な要素が、どのような観点から用いられているのかを紹介する。

加えて研究2～研究4では、「運資源」的な観点から描かれた実際の経験についての自由記述を分類し、実際に「運資源」的な表現が用いられやすい状況を設定する。以上から、一般に流布している「運資源」的な物語の構造、とりわけ最もコアな（マスターナラティブ的な）物語像を提示することができるのではないかと考えている。

本研究では「運」が資源のように語られやすい状況、それ自体に注目する。そのため、内容の真偽や語り手の「運資源ビリーフ」の有無は問わない。このような語られる経験自体は実証という枠組みから外れるかもしれないが、ブルーナー (Bruner, 1990/1999) がフォークサイコロジーとして取り扱ったように、物語的な要素を探ることにこそ、一般的な「運資源物語」の面白さを分析する価値があると考えられる。また、一つの物語の意味を分析するだけでなく、モデル化まで視野に入れる手法は、やまだ (2000) がライフストーリー研究において展開している。さらには、ハイダー (Heider, 1958/1978) が「素朴心理学」(naive psychology) として、寓話などの分析から原因帰属の概念を抽出している。以後のジョーンズ&デイビス (Jones & Davis, 1965) の対応推測理論やケリー (Kelley, 1967) の共変原理という原因帰属研究や、先に挙げたロスやワイナーの研究もこれを土台として発

展してきたものである。

このように仮に実証レベルに還元して考えた場合にも、「運資源物語」はメタファーとして、しろうと理論などの土台に用いられやすいのではないかと推測される。逆に語られる頻度から考えれば、語り継がれ、用いられやすい物語であるからこそ、物語自体を分析することによって、人々が「幸運」をどのように捉えているかという「幸運」観をかいま見ることができると考えられるのである。

## 研究1

### 目的

研究1では、電子メールマガジン読者の意見が紹介された「運資源」的な記述を、主な具体例として取り上げる。その中で「運資源」的な要素がどのような観点から用いられているのか、その特徴を抽出する。

### 方法

題材として取り上げるのは「Chance It! メーリングサービス」(株式会社チャンスイット発行) というメールマガジンである。これは登録した読者に対して、懸賞・プレゼント情報が電子メールによって毎週3回無料で配信されるサービスである。

このメールマガジンを取り上げる理由は2つある。一つはこの種のメールマガジンの中では配信数が最多で(2001年12月末時点で、73万8000部発行)、多くの者が目にしている点である。もう一つはこのメールマガジンには懸賞・プレゼント情報以外に「お便りコーナー」が設けられている点である。「お便りコーナー」では、メールマガジン読者の懸賞にまつわる話が毎号2～3通紹介されている。

本研究では、この「お便りコーナー」に紹介された記述から、「運資源」的な表現が用いられているものを事例として取り上げた(「」内は原文をそのまま用いている)。対象にしたのは、1999年1月から2001年12月までの3年分、計14事例である。

なおこのように抽出された記述は、編集者が既に出しているためデータの代表性の点で問題がある（「螢雪時代」の雑誌記事を分析した尾中（1990）も同様の指摘を行っている）。

ただ、研究1の目的は得られた記述のみから「運資源物語」が語られる状況の一般化を目指すものというより、むしろ「運資源物語」はどのような形で用いられるのかという、使用方法の様子を考察することにある。そのため、新聞の女性投稿欄を分析した大出（1989）にならい、大まかな分析の見通しを立てながら、各記述を事例として扱った。

また、以下の事例は懸賞及びメールマガジンという限定された文脈における記述であることも問題があるとして指摘される点である。しかし、研究1には研究2～研究4の調査内容を検討する目的もある。そのため、新聞やマンガの記事も補足的に紹介する。逆に懸賞メールマガジンの長所として、テキストとして分析が可能である点、懸賞的中に対する心情が短い文章で表現されているという点で同じ形式で特定の期間のデータを一度に抽出可能な点、全国から地域の偏りなく声を拾うことが可能な点は挙げておきたい。

### 事例及び考察

#### 事例1

『クイズに答えてハワイに行こう』当たっちゃいました。家族からは『一生分のツキを使ってしまったな』とからかわれています。(1999/08/30)

#### 事例2

「ずっと夢だったディズニーでのクリスマスが実現できます o(\*^▽^\*)o でもこれで運を使い果たしちゃったのかなあ〜?」(2001/12/07)

#### 事例3

（懸賞でイタリア旅行を当てて）「嬉しい反面、1999年の運を使い果たしてしまったようで、寂しい気がします。」(1999/01/05)

#### 事例4

（ホテルのペア宿泊券が当たって）「しかし、たがいま就職活動中……。運が向いてきたのか、使い果たしてしまったのか……。心配です。」(1999/05/02)

#### 事例5

（旅行と商品券が続けて当たって）「ミレニアム前半で運を使い果たした感もありますが」(2001/06/21)

#### 事例6

（立て続けに懸賞が当たって）「今年は運が年末に片よっていたのかなあ。今年も後わずかだから、運を使いきってもいいですよー?! 来年も懸賞応募頑張ります!」(2001/12/28)

#### 事例7

（グアム旅行が当たった上に）「通知が来た日は、デパートの福引でも1等が当たったので、怖いくらいです。何か悪いことが無いといいけど……」(2000/12/20)

#### 事例8

（懸賞に全然当たらないことから）「妻は横で『私と結婚して運を使い果たしたのね。』と言いつつ。」(2000/04/02)

#### 事例9

（コーヒーの懸賞に当選して）「ヤッター! コーヒー大好きなので、こういう懸賞が出るまで待っててよかったです。運はこれからも上手に使いますね。」(1999/04/02)

（各事例後の括弧内は発行日を示す。残りの事例は以下の文中に提示した）

「運資源」に関する記述の多くは、「幸運」な結果を得た状況で用いられている。中でも、その表現を「幸運」を得た本人が用いたか、他者から述べられたものかで状況は大きく変わる。事例1のように他者から述べられた場合には、「娘はこれで一生分の運を使い果たしたねなんて言っていますが」（事例10, 2000/03/12）、「職場のみんなは（中略）『一生の運を使い切ったね』と言ったり」（事例11, 1999/10/06）など、ほとんどがからかいや冷やかしなど、明らかに冗談であることをほのめかす形で用いられている。

これに対して、「幸運」な結果を得た本人が「運資源」的な視点から事象を語った場合には、この表現は事例2のようにジョークとして用いられている場合も

ある。しかしながら、「幸運」自体はポジティブなものであったとしても、それを素直に喜べない、何らかのネガティブな感情が生じる可能性を事例3は示している。

このネガティブな感情の原因は「運を使ってしまった」という「運の減少感」や、「個人の持つ運の総量は決まっている」という「運の定量感」が生じたことから来ていると考えられる。

なぜ「幸運」を素直に喜べないのかという理由を考えてみた場合に、まず事例4のように、成功すべき別の重要な事象が語り手に意識されている可能性がある。類似した記述では、「でも普段100人以上の大量当選くらいしか当たらない私は『これで運を使い果たしたのでは?』と不安に思ってます。もうすぐサマージャンボの発表があるのに……」（事例12, 2000/08/08）という例が見られた。「運の減少感」や「運の定量感」は、このように独立した別の事象を意識した場合に想起されやすくなると考えられる。結果として、現在得た「幸運」はネガティブな形で語られる。

また事例5や事例6を比較すると、前者に比べて後者には残された年内の日数が少ないからこそ、懸賞的中がポジティブに捉えられていることが分かる。つまり、「運を使ってしまった」という前者では、懸賞的中よりも残りの日々のことを考えた場合の「良いことがないだろう」という予測の方に、語り手の視点向けられているためにネガティブなのである。

「運の減少」がポジティブに捉えられている、もう一つの例として、あるロックバンドが「今年一年の運を使い果たしたとしても、価値あるステージにしたい」（サンケイスポーツ, 2002/02/17）という記事がある。価値が高い「幸運」は、仮に「運が減少した」としても、ポジティブに捉えられることがあると言えるだろう。これは事例2にも共通する。

さらに事例7では、未来の事象がネガティブに予測されている。ここでは良いことが起こらないだけでなく、「悪いことが起こるのではないか」という不安感が描かれている。類似した例で、直接「運資源」という表現が用いられている訳ではないが、娘が次々に賞品を得ていく姿が「さすがに3回目に当たったときはちょっと怖かったです」（事例13, 2000/01/12）と判断されている記述も見られた。このような「幸運」に

対する畏怖感に関する表現も、「運」が資源的に描かれる場面でしばしば用いられていると考えられる。

「運が減少した」と感じた場合のほとんどにおいて、予測としてポジティブ事象は起こらない、またはネガティブ事象が生起するかのように説明される。逆にセルフハンディキャップ戦略<sup>1)</sup>として、ネガティブ事象が生起するだろう、とあらかじめ予測しておくことで、本当にネガティブ事象が起きたときの理由付けとして用いられることもあるだろう。

このような場合には、自分の行動はさも運命に縛られてしまったかのような形で記述される。例えば、競馬でかなりの高配当の馬券的中したことを題材として、「極度に運を消費したので、当分馬券は買わないことにしました。GW中は家を出ない方がいいかもしれない」と記述された電子メールを筆者は受け取ったことがある。これは冒頭で挙げた図1の「好きなパチンコをやめた」という部分と同種の予測である。つまり「運資源の減少」によって、書き手には未来に取る行動が上手くいかない、あるいはネガティブ事象が生起すると予測される。そのために積極的な行動は控えるという姿が描かれている。図2でも結果のネガティブさがあらかじめ予測されていたかのように、「ラッキーゲージは貯めておくべきだった」という教訓的なオチがついている。

事例3~5や事例7のように、未来の事象について不安を持つ場合だけではなく、事例8のように事後的に振り返って原因推量を行う場合にも、「運資源」的な記述は見られる。事例8では思いもよらないネガティブ事象の原因が「運資源の消費（減少）」という形で説明されている。他には懸賞に全然当たらないという書き手の嘆きに対して、『「お前の運は、あのオロナミンCで使い切ったんだよ。もう、やめな。」と……」（事例14, 2000/06/20）という他者からの指摘を挙げた記述も見られる。

また、他者だけでなく語り手自身の例として、プロ野球のある試合で最優秀選手賞を取った選手が、その後を訪れた成績不振に対して、「オレ、オールスターで運を使い果たしたのかな」（サンケイスポーツ, 1998/08/02）と語ったという記事に見られるように、自己と他者どちらに対する原因推量にも「運資源」を用いた表現は用いられることがある。

最後の事例9では「運を残しておいて良かった」のように、自分の行動と得た結果の関係がポジティブに捉えられている。これは残っていたという「運の残存感」がポジティブに強調された例である。しかし、取り上げたメールマガジンには、この事例のみしか見られなかった。補足であるが、大相撲の関取が勝利に際して「今まで運を使ってなかったので、ぼちぼち使わせてもらいたい」（報知新聞、2000/09/14）と述べたコメントが掲載されたものがある。これは「運の残存感」の例と言えるだろう。

以上から「運資源」に関する表現が用いられる状況について、三点ほどその特徴が挙げられる。

1. そのほとんどは「幸運」な結果を得たことがきっかけとなっている。つまり「運が資源であること」が意識されるような特定の状況があると考えられる。
2. さらに他者の状況ではなく、自分が置かれた状況の説明として用いられる場合には、「幸運」な結果は「運の減少感」や「運の定量感」の観点から説明されている。事例4のように就職活動中など何らかの理由がある場合には、この「運の減少感」や「運の定量感」から、未来の事象についてネガティブな予測がなされる。そのため、「幸運」自体を素直に喜べないことが述べられている。「運」が減ったり、量が決まっていることが喜ばれるものではないなら、この意味での「運」は、事象を良い方向に導く「幸運資源」と呼ぶ方が適切かもしれない。
3. 逆に、事後的に行動を振り返って原因を推測する場合に「運資源の消費（減少）」という考え方をを用いて、上手くいかなかった過去の行動の結果を「運を使ったから失敗した」と説明している状況も見られる。

以上の多くの事例に共通するのは、「幸運」そのものは単独ではポジティブな価値を持つかもしれないが、「幸運」を得たことで、その後の人生がネガティブな方向へ展開するだろうという物語の描かれ方である。つまり、「幸運」を得たことが、喜べない、落ち着か

ない物語として描かれており、「幸運」によって成功したのは良いが、後にその影響によって失敗し、後悔するという展開が提示されているのではないかと考えられるのである。カイヨワ（Caillois, 1958/1970）も「幸運」を偶然に得た状態への不安感を、以下のような形で記述している。

「一人の若い娘が、次第に手強くなって行くライヴァルを打ち破り、ついにミス・ユニヴァースの栄冠を得る。彼女は映画スターになり、あるいは、百万長者と結婚する。無数の意外な女王、貴婦人、ミュージック、魔女などがこれに倣って選ばれる。彼女たちは、よくて一シーズンの間、海岸の洒落たホテルで、うっとりするような、しかし、落ち着かない名声を獲得する。」  
(p.170-171, 波線は筆者による)

しかし、ここで注目したいのは、上に挙げたほとんどの事例では、予測は立てられていても、述べられた時点では一連の物語は完結していないことである。つまり図2のように、最終的にネガティブな帰結を迎えたのかどうかは分からないのである。喜ぶことのできる物語は展開されないのだろうか。これについては、以下の研究をふまえ、改めて総合論議で考察を行う。

以上の事例の大半は懸賞関係のメールマガジンから得ている。そのため、「幸運」を得た状況で述べられたものが多いという事例の偏りはもちろん否めない。しかしながら、他の新聞や雑誌の記事などを見ても、「運資源物語」の起点は「幸運」な事象から描かれることが多いのである。果たして、このような偏りは一般的な物語像を反映したものだろうか。

そこで以下の研究2及び研究3では、それぞれ「運資源」的な記述が減少するというネガティブな表現で捉えられる側面、及び増加や残存というポジティブな表現で捉えられる側面に焦点を当てて、事象の背景を探る。

## 研究 2

### 目的

研究 1 から「運資源」的な事象の語られ方には、ネガティブな観点から「幸運」を捉えているものが多いと考えられる。しかしながら、事例 9 のように、必ずしも全てがネガティブに捉えられている訳ではない。そこで実際の経験事例を調査し分析することで、「幸運」がネガティブな表現で捉えられやすい状況、とりわけ「運を使ってしまった」とされるのは具体的にどのような状況なのか、その状況の特徴抽出を試みる。

### 方法

手続きとして、まず「あなたが『運を使った』『運が減った』と感じた状況を具体的に記述して下さい」という質問文によって、このような状況を自由記述で集めた（回答者は大学生から社会人までの 267 名。男 90 名・女 175 名、不明 2 名、平均年齢 22.8 歳）。このうち、具体的な状況が 69 名によって記述され、集まった記述（以下「運の減少感」に関する記述）の数はのべ 73 である。これらについて KJ 法を用いて分類を行った。

このような収集方法は、「運の減少感」を感じた経験という語られる対象を記述の文脈とは切り離している点から、ややもすれば一面的になる。また質問文に誘導され、例えばしろくと理論とは外れて、陳腐なジョークを回答する場合があるかもしれない。しかしながら、問題でも述べたように、本研究は内容の真偽を問うものではない。そのため、共有されている典型的な物語自体の構造を分析する点で、記述を集め分析するという手法は、ある程度は、妥当な方法と考えられる。また、背後に「運資源」をモチーフにした一つの大きな物語があるとしても、実際には研究 1 に見たように、物語そのものが説明されるのではなく、あくまで事象を介して「運資源」について断片的なエピソードが語られている。以上の点を考えて、以下の研究では、あえて経験を自由に記述してもらうことで、でき

るだけ多くの「運資源」らしい記述を求めることを優先した。

この「運の減少感」に関する記述は、単一の事象内容が記述してあるもの（54 例）と連続した複数の事象内容が記述してあるもの（19 例）に分類可能である。

まず、筆者が単一の事象が記述されたものを分類しカテゴリーを作成した。「模試で成功した後の本番の試験」のように、「模試」と「入試」のような連続した複数の事象が記述されたものは別々に分類を行った。しかし、単一の事象で行ったカテゴリーの「幸運」は複数の事象が記述された「幸運」とほぼ一致したため、両者は最後に統合された。分類されたカテゴリーは 2 人の評定者（心理学を専攻する大学院生）に小カテゴリーの分類を再度行ってもらい確認した。このカテゴリーに対する筆者を含めた評定者間の一致率は 81%、83%、86%である。一致しない記述は、話し合いにより改めてカテゴライズされた。

### 結果及び考察

カテゴリーの分類は表 1 に示した。最も特徴的な部分は「ギャンブルで大勝ちした」や「入試で合格した」に代表される「巨大な幸運」のカテゴリーと、「懸賞で中途半端なおもちゃを当てた」に代表される「つまらない幸運」のカテゴリーだった。この 2 つのカテゴリーは「幸運」の程度という意味で、全く対照的に位置していると思われる。そこで両者に共通して「運の減少感」が生じたとされている理由を考えてみたい。

「巨大な幸運」という結果を得た場合に「運の減少感」が生じたとされているのは、おそらく自分が想像した結果を遙かに上回るような、ポジティブな利益を得たように書き手が感じたためと推測される。「巨大な幸運」を得た事象の種類についても、入試やギャンブルのように結果が劇的なものが多かった。研究 1 では「巨大な幸運」を得たことの畏怖感が表現されていた。このような畏怖感と同様に、「幸運」を受け止めきれないというネガティブな感情が、「運の減少感」という形で表現されているのではないかと考えられる。

しかしながら、この説明は「つまらない幸運」には

表1 「運の減少感」に関する状況の分類

N=73

		単一事象(N) 複数事象(N)		代表的な記述	
「巨大な幸運」 39 (53%)	過剰な成功	連続した的中	3	1	「懸賞でいろいろ当たったとき」
		ギャンブルの大勝ち	6	3	「パチンコで大勝ちした」 「今まで勉強していた所が丁度出た前に、合格の神頼みをしていた(神様はそんなに多くのことを聞いてくれない)」
		望みの叶いすぎ	1		
	重要な幸運	受験の合格・就職	9	2	「合格率20%と言われた本命の大学に合格した」 「車のブレーキが利かなくなった時に、事故らずにすんだ」
		生命の危機の回避	3		「レポート提出が一週間延長になった」
		対人的な出会い	1	2	「大切な人と出会えた」
満足した幸運	価値のある中	4	2	「コンサートチケットですごくいい場所が取れた」	
	好きな相手の告白	1	1	「高校の時、大好きだった人に告白されたこと」	
「つまらない幸運」 27 (37%)	場違いな成功	どうでもいい的中	7	6	「祭りでじ引きがあつて中途半端なおもちゃを当てた」
		問題が簡単だった		1	「プレテストが簡単すぎて、難しい問題が本番で出るのではないかと」
		タイミングの悪さ	2		「おとなが空いてない時、食べ物をもらった」
	努力で解決可能	異性運の無駄遣い	1		「男運のムダ使い！」
		努力が無駄になった	1	1	「一生懸命勉強したテストが異常に簡単だったとき」
		努力なしで得た幸運	3		「テストで全然勉強しなくても記号だけで良い点が取れた」
山勘での的中	山勘での的中	4		「テストの山勘が当たったとき」	
	出し惜しみ		1	「馬券を買えば絶対当たると思っていたのに、500円しか買わなかった」	
普通の幸運 5(7%)		勝負事の勝利	3		「ゲームでお金を賭けて勝った」
		お金を拾った	2		「図書館でさいふをひろった」
ほか 2(3%)		gambler's luck		1	「ゲームセンターの輪投げで一回目で成功し、その後何十回もやったが、結局うまくいかなかった」
		快便		1	「テスト前、何故かの快便で」

あてはまらない。なぜ「つまらない幸運」によって、「運の減少感」が生じたとされるのだろうか。そこで「幸運」が無駄なものとして捉えられる理由を考えると、得られた「幸運」は、他の事象と比較して相対的に価値が低いのだと強調されている点が挙がる。これは就職活動と抽選的中を比較して、抽選的中が相対的に無駄なものとして挙げられている研究1の事例4と同じ構造である。

連続した複数の事象が記述された内容を見ても、「ガラガラで3等賞が出た時に、運を使ってしまったと思った。次の日テストだったから……」という波線部の記述のような、重要な事象と相対的に比較されていた。必ずしも全ての場合に重要な事象と「幸運」が明確に比較されている訳ではないだろうが、潜在的には比較されているかもしれない。そのため『「幸運」を得るにはふさわしくない』という状況に対する違和感から、無駄に「運」を浪費したような感覚として、「運の減少感」が記述されているのではないかと考えられる。

「巨大な幸運」と「つまらない幸運」の両者において得た「幸運」の価値に付与される重要性は異なっ

ている。しかしながら共通しているのは、その状況で得た「幸運」の価値の程度に対する違和感である。これは、おそらく書き手は適度に「運」を消費するような「幸運」を求めていることを意味するのではないかと考えられる。

仮に「幸運」の程度の大小を軸にしてこれらの事象を並べたとすれば、その程度の位置付けからは「巨大な幸運」(大)と「つまらない幸運」(小)に含まれる事象はそれぞれ両端に位置すると考えられる。これに対して、この軸の中間に相当するような「運の減少感」に関する記述はほとんど見られてない。この理由として、そのような「幸運」は分相応な結果を得たと判断されていることが考えられる。

さらに、複数の事象が記述されている内容を見てみると、時間的に後から生起する事象が前に生起した「幸運」の質を位置付けていた。これらは大きく二分される。一つは先述したように、後に控える重要な(未来の)事象と比較された結果として、先に得た結果が「つまらない幸運」と捉えられている場合である。もう一つは「どうでもいいジャンケンで勝って、大切なジャンケンで負けた」のように、「幸運」の後にネ

ガティブな結果を得たことから「運の減少感」を感じた経験が記述されている場合である。

後者の場合には、「幸運」な結果によって「運が減少した」と捉えられている部分は前者と共通している。ただし「運の減少感」は「幸運」な結果の後ではなく、ネガティブな結果を得た直後に生じたとされている。このことから、どちらかといえば「減ってしまった」という減少感よりも、「減ったから失敗したので、運を残しておけば良かった」という後悔の吐露に近いような、いわば後付け的な解釈が後者の場合には記されていると考えられる。これは、現在における過去の事象の価値が語られる時点で変化していることを示しており、「運資源」に関する語りの物語性を示す例と考えられる。

さらにネガティブな結果を得た後で「運の減少感」が生じたという後者では、事象は全て「幸運」の後にネガティブな結果を得たという順序で描かれており、かつ実際にネガティブな結果を得たというオチがついている。実際にはネガティブな結果を得ていない前者においてもまた、後から生起する事象がうまくいかないだろうという予測が付随しており、この点が単一事象のものとは異なっている。この付随するネガティブな予測や、実際の結果が物語全体としてのネガティブ性を規定していると考えられる。

以上の研究 2 からは、懸賞の場合だけでなく、文脈に応じて様々な「幸運」が「運の減少感」と結び付くと言える。ただし相対的な価値付けからは、「減る」という表現自体はネガティブでも、必ずしも「運」が減少すること自体はネガティブではないことが分かる。

このような減少というネガティブな観点から描かれる「運資源物語」の特徴は捉えられたと言えるだろう。今度はポジティブな観点に着目点を移す。

### 研究 3

#### 目的

研究 2 とは逆に、「残っている」「増える」などのポジティブな観点から捉えられた「運資源」的な事象の

記述を分析し、状況の特徴抽出を試みる。

#### 方法

ポジティブな観点として、「運を残しておいて良かった」「運が残っていた」「運が残っているから大丈夫」(以下「運の残存感」に関する記述)、及び「運が増えた」「運をもらった」(以下「運の増量感」に関する記述)、と感じたそれぞれの状況を具体的に書いて欲しいという形で、自由記述を集めた。回答者は研究 2 に参加した 267 名のうち 210 名に専門学生 164 名を加えた 374 名(男 136 名・女 236 名、不明 2 名、平均年齢 23.3 歳。人数を追加したのは記述数が少なかったためである)。これらは研究 2 と同様に KJ 法を用いて分類を行った。カテゴリーの再確認は研究 2 と同様(分類されたカテゴリーへの一致率は 82%、82%、88%)に行っている。

#### 結果及び考察

まず「運の残存感」に関する記述の分類を表 2 及び表 3 に示した。カテゴリーは記述された事象数に依存している面も見られる。しかしながら、1 記述を除いて「運を残しておいて良かった」という記述は「幸運」な結果を得た直後に述べられているという点で共通する。つまり結果自体はポジティブな方向性を持つことが特徴であると言える。

同じポジティブな方向性を持つ結果を得ていても、「運の減少感」の記述と異なり、書き手はいかにも満足しているかのように描かれている。この理由として、「ずっと使ってなかった」や「今まで良いことがなかった」という記述が、付加されていた点が挙げられる。つまり、ここで得た「幸運」が妥当である姿が同時に提示されていると考えられる。「運の減少感」に関する記述内容との差異として、「運の残存感」に関する記述には「つまらない幸運」の例が見られなかった点が挙げられる。

さらに、連続した複数の事象が記述された内容を見ると、ほとんどが「ギャンブルで勝った時、少し期間を空けて(また勝った)」のように、自らの能動的な選択や行動が再度の「幸運」を招いた原因のように記

表2 「運を残しておいて良かった」と感じた状況の分類

		単一事象(N) 複数事象(N)		代表的な記述	N=18
単一の「幸運」後 12 (67%)	過剰な成功	麻雀で高い役の上がり	1	「麻雀で国士無双十三面待ちでソモで観アガリたとき」	
	満足した幸運	コンサートの子チケットの的中	1	「どうしても行きたかったコンサートのチケット、それも一番前が埋められたとき」	
		金銭を得た	宝くじの的中	1	「宝くじが当たったとき」
		お金を拾った	1	「1000円拾ったとき」	
	重要な幸運の後	重要な試験・受験で合格	7	「今まで良いことが多かったが学校に受かって」	
最後「幸運」な結果を得ている 5 (28%)	回避の後の成功	同じモノを後で安く購入	1	「その日は買おうのをやめたが、翌日に行ったら最初に提示した金額よりも安かったとき」	
	幸運の連続	後で有効にお金を消費	1	「車の購入をもたもたしていたら、入学金に当てることができた」	
	失敗後の幸運	続けてギャンブルに勝つ	2	「ギャンブルで勝った時、続けて行かす少し期間をあけて行ったとき」	
「不運」の後 1 (6%)	「不運」の後	悪いテストの代わりにケガ回避	1	「その日のテストがダメだったが、帰宅途中ゴルフボールを頭に当てるところだった」	
		宝くじが外れた	1	「友達と一緒に宝くじを買い、自分が外れた場合」	

表3 「運が残っていた」と感じた状況の分類

		単一事象(N) 複数事象(N)		代表的な記述	N=24
単一の「幸運」後 18 (77%)	negative状況の回避	ピンチの状況を回避	9	「絶対、間に合わないと思っていたが道がずいとおおきく遅れなかったとき」	
		事故の回避	1	「人をひきそうになって寸前で止まれたとき」	
		事故だったが無傷	3	「原付で事故を起こそうなときに無傷だった時」	
	苦労しないで幸運	楽しく成功できた	4	「テスト勉強せずに受かったとき」	
		お金を見つけた	1	「何気に掃除をしてお金が残っていたとき」	
最後「幸運」な結果を得ている 6 (23%)	ネガポジ状況の連続 (ギャンブルで負けたが) お金を拾う	彼女ができた	1	「パチンコで負けたとき、帰りにお金を拾ったとき」	
		悪い流れの変化	2	「彼女と別れてしまったけど、新しい彼女ができた時」	
	幸運の連続	続けてギャンブルに勝つ	2	「パチンコをやっていたもう当たらないかと思っていて、帰ろうかなと思った時に当たりが来た」	

述されていた（「最後に『幸運』な結果を得ている」というカテゴリー）。ここにはポジティブな結果を実際に連続して得たことを示す記述も含まれる。

その他、「幸運」な結果を得る前にあらかじめネガティブな結果が生じたことを記述の伏線としていたものが見られた。1 記述だけ見られたネガティブな結果をもつ内容は、自分だけ宝クジに外れたことであり、これは将来のために「運を使わないで良かった」ことが表現されているのではないかと考えられる。

これと比較して、「運が残っていた」（表3）という記述では、「幸運」な結果を得た直後という状況は、「運を残しておいて良かった」と感じた場合と共通している。ただし、とりわけ目を引くのは「事故を起こしそうな時に無傷だった」など、「幸運」な結果の中でも、ネガティブな結果を回避できた後で「運の残存感」が生じたという記述が多く（「ネガティブ状況からの回避」という中カテゴリーに含まれる13例）見

られた点である。この理由の一つとして、「残しておく」という能動的な表現に対して、「残っていた」という表現は受動的であることが考えられる。

これらの記述には、予期されるネガティブな結果が明確に記述されている点から、ネガティブな結果の回避はテイゲン（Teigen, 1995）のいう反事実的（counterfactual）な「幸運」に相当する。テイゲンは「幸運」という判断が、相対的な結果の想像（例えば成功した場合における、失敗した場合の想像）との比較によって生じることを示している。これに基づけば、「運が残っていた」ことは結果の方向性が予期せぬ意外な方向であったことを提示する例とも言える。単一事象ではなく、複数の事象が記述されたものの多くが、ネガティブな結果から一転して「幸運」な結果を得たものであることも、この点を裏付けると言えるだろう。

以上の「残っていた」「残しておいて良かった」と

表4 「運をもらった」「運が増えた」と感じた状況の分類

		単一事象(N)	複数事象(N)	代表的な記述
運をもらった 19 (70%)	他者との接触	結婚後	1	「結婚後、物事がスムーズに行くようになった」
		友人にモノをもらう	2	「人からよいものをもらったとき」
		共にギャンブルに行き勝つ	2	「パチンコに行く時、この人と行くと必ずかかる人がいる」
		人に助けられる	2	「死にかけていたが助けられたから」
		ギャンブルでのおごり	1	「彼氏がパチンコで勝って、おごってもらった時」
	非科学的なもの	お参り	1	「お参りに行った時」
		おみくじ・占い	4	「おみくじで大吉」
流れ星		1	「流れ星を見たとき！」	
他者の行動	便の付着	1	「オムツ交換時、便が出た時うんがついた」	
	他者の失敗	3	「リレーでもうためたと思ったが、他のチームがバトンを落とした」	
	他者に先を越されず	1	「発表とかで自分の番が回ってくるまで、他の人に自分の意見を取られなかったこと」	
ツキの正当性 2 (7%)	ツキの正当性	正しい行為	2	「学校の掃除をまじめにやっていたらテストの点を上げてもらった」
合格・的中 4 (15%)	合格・的中	懸賞的中	1	「懸賞で当たったとき」
		あきらめていた試験の合格	2	「准卒の試験のとき、解答合わせでは絶対に落ちていたのに合格発表では受かっていた」
		補欠・ぎりぎり合格	1	「学校に入るのにホケン合格したとき」
増えている 2 (7%)	幸運の連続	連続したギャンブルの的中	1	「ギャンブルで間隔を開けてまた当たったとき」
		雨女の解消	1	「今まで出掛ける際には必ず雨で雨女と言われていたけど、最近晴れているから」

いう、過去の「幸運」な事象を中心に描かれている記述に対して、将来に向けて「運が残っているから大丈夫」とされた記述は、「まだ事件などに巻き込まれていない」など3例しか見られなかった。これは能動的に「運を残しておく」ための行為は取ることができても、結果として思い通りに将来使える訳ではないという、「運」の使用に際する不自由さの表れであると推測される。

続いて「運が増えた」「運をもらった」という「運の増量感」に関する記述(表4)では、「結婚後、物事がスムーズに行くようになった」などの他者との接触や、他者の失敗、「お参り」など、何かしらの非科学的な暗示が挙げられていた。マジカル・シンキング(magical thinking, 呪術的思考)的な、「運」と他者を結合して捉えている結果からは、これらのカテゴリーは「増えた」というカテゴリーより、むしろ「もらった」というカテゴリーに括るのが妥当であると考えられる。この種の記述が「運の増量感」記述のうち、約7割に相当していた。

その他には、「増えた」というより「増えている」という記述(「増えている」というカテゴリー)、正しい行為が報われたことに対する評価(「ツキの正当性」のカテゴリー)など、ポジティブな結果(「幸運」)の後に「運の増量感」が生じたことが記されていた。つまり結果そのものが「運」を増加させたのではなく、それ以前に、何かしら「運をもらっていた」

ことを、「幸運」を得たことを契機にして、改めて意識するようになったことが記述されたとと言える。

ここで気がつくのは、もし減ることと増えることが対称の関係にあるとすれば、「運の減少感」が「幸運」な結果を得たことと結び付くのにに対して、「運の増量感」は「不運」な結果を得たことと結び付き、「不運」な結果を得た後で生じるように描かれるはずという、取り上げられる事象に対称性があるのではないかということである。しかし実際にそのような記述は全く見られなかった。記述数も「運の減少感」に比べて少なく、記述される「幸運」の程度に違いが見られる(「つまらない幸運」は見られない)程度で、事象の種類にも特徴がある訳ではなかった。

以上から、ポジティブな観点から描かれた「運資源物語」の中心も「幸運」な事象にあると考えられる。最後に「運資源」的な捉え方のさらなる背景を探るために、「運の量は決まっている」という「運の定量感」に関する記述を分析してその特徴を抽出する。

**研究4**

**方法**

「運の量は決まっている」(以下「運の定量感」に

表5 「運の量は決まっている」と感じた状況の分類

		単一事象(N) 複数事象(N)		代表的な記述	N=12	
個人差	他者との相対的比較	自分に来ない幸運	4	「友達に合格して、私が落ちたとき」		
	6 (50%)	他者の人生経験	二者間の差異	1	「私は経験したことがないのだけれど、同じ場所で一緒に買い物をした人がクジをして当たった人と当たらなかった人がいた時」	
			生き方と人生を見て	1	「色んな人の生き方と人生をみて」	
総量	幸運の後の不運	幸運の後の不運	4	「東京に行った帰りがひさんだったから、東京では幸せだったのに」		
6 (50%)	不運の連続	不運の連続	2	「悪いことが連続したとき」		

表6 「運を残しておこう」と感じた状況の分類

		単一事象(N) 複数事象(N)		代表的な記述	N=21
重要な事象の前	重要な勝負	重要な試合や試験の前	8	「勉強がライバル、国家試験のために」	
		最後に重要な試験	1	「最終日に超苦手の教科が控えていたとき」	
		負けるとイヤな勝負の前	1	「イヤなことをする時のジャンケン」	
浪費を防ぐ	浪費を防ぐ	将来のため	2	「結婚できるように残しておく」	
		低価値の試合	1	「試合の予選も、本戦に残らなかったから」	
		ギャンブルに行く前	2	「パチンコをうらと思ったがやめた」	
不運の回避	不運の回避	つまらない勝負	1	「どうでもいもジャンケンの勝負」	
		幸運後のイヤな予感	1	「幸福なときに、この次何かイヤなことがあるかもしれないと思う時」	
		知り合いの事故の話	1	「友達に事故をして医者3日がヤマだと言われた子がいるが、今はすごく元気でヒンビシしている。こういう時のために運を残しておきたい」	
幸運の持続	幸運を持続させたい	ある程度幸運な結果を得たあと	3	「パチンコで明日のため今日はひくとき」	

関する記述)、及び「運を残しておこう」(以下派生的な「運の定量感」に関する記述)と感じた状況を具体的に書いて欲しいという形で、自由記述を集めた(回答者は研究3の専門学生164名(男67名・女87名、平均年齢22.9歳、SD=6.30)。これらの記述は研究2や研究3と同様にKJ法を用いて分類を行い、カテゴリーの再確認も同様(分類されたカテゴリーへの一致率は一致率は79%、85%、85%)に行った。

結果及び考察

「運の定量感」に関する記述の分類は表5に示した。大きく分けて「運の定量感」の記述は総量について述べたものと、個人差の有無を述べたもの(平等か否か)に分類することができる。

総量についての記述は、全ての事例(6事例)に複数の事象が記述されていた。複数の事象の内容は、ネガティブな結果が連続した場合とポジティブな結果の後にネガティブな結果が生じたことで「運の定量感」が生じたという内容であった。また個人差についての記述は、他者と比較したことによって、自己の持

つ「運の絶対量」が少ないことを体感したという経験であった。「運の定量感」に関する全ての記述に共通しているのは、自他の体験に関係なく、ネガティブな結果を得た直後についての記述であるという点である。

また「運を残しておこう」とする状況(表6)は、時間軸上の位置で、不確実な事象が生起する前に位置する。ここに挙げる事象は、記述された事象の価値付けの対照性から二分できる。一つは主に受験や結婚など、成功価値が高いと考えられる事象に向けた意識に関する記述であり(「重要な事象の前」というカテゴリー)、もう一つは「つまらないジャンケン」のように価値の低い事象そのものに対する記述である(「浪費を防ぐ」というカテゴリー)。

両者の関係は、複数の事象が描かれている記述から探ることができる。複数の事象のうち、時間的に前の事象は必ず「本戦前の予選」のように価値が低いものとして位置付けられていた。つまり、両事象は比較された上で、相対的に価値付けられている。結果として「運」の無駄遣いや浪費という観念が生み出されたため、時間的に前の事象は「運を残しておくべき」状況として描かれていると考えられる。これは研究2で述

べた、「幸運」の程度に対する違和感の表現と共通している。

逆に、自ら「運」を浪費せずに残しておいたり、使い過ぎないようにするという自発的な行動は、「他者が事故にあったが助かったのを見た」という例のように、将来の「不運」回避とも関連しているように描かれている。このことから、自発的な「運」の節約が肯定的なものとして捉えられていることが分かる。

このように定量的な視点を持つことは、単一の時点や単一の事象に関する「運資源」の増減について考慮することを意味するのではない。むしろ一定の期間を通してトータルで、「幸運」な結果を得ることに対して、ポジティブ・ネガティブのバランスを考慮することを意味していると考えられる。この場合、一定の期間としては、せいぜい二、三の事象にまたがるだけの比較的短い期間から、人生の全体に及ぶような長い期間まで、長短いろいろなケースが考えられるだろう。

他の記述と比べて、「運を残しておこう」という記述数が少ない点も含めて考えると、「運の定量感」は生じた事象と直接結びついて生じるものではない。むしろ「運の定量感」と呼ぶよりも、結果の背景を改めて解釈することで用いられる「運の定量理論」と呼ぶほうが適切であり、他の概念を包括するような上位概念であると推測される。また「運を残しておこう」という記述からは、「定量感」が生じている状態というよりも、むしろ「残しておく」背景の説明に、定量的な説明が用いられているのではないかと推測される。

## 総合論議

### 「運資源物語」の特徴

本研究では様々な記述を基にして、どのような側面から「運資源物語」が描かれるのか分析を行った。これらの内容から、述べられた時点と事象が生じた時点との時間的な関係が、物語の鍵を握る重要な要素であると考えられる。そこで、以下の図3では用いられた事象を元にして時間軸に沿って組み立てて、物語全体の構造を示した。

想起した順序でなく、事象が生じた順序に従えば、記述の大半は「幸運」の後のものであり、この時点が一応の起点となって、「運資源物語」が述べられている。「運の減少感」の場合には、後の事象に対する結果の予測も想起されるために、この時点では一連の物語は閉じられていない。また直接「幸運」を得ることで生じる訳ではないが、後の事象（円内の部分）を想像することで派生的な「運の定量感」が生じることもある。この後の事象（とりわけ重要な事象が多い）は時間が経過したある時点で生じることになる（点線部分）。ここで「不運」を得たことが契機となって、先の「幸運」が再びクローズアップされるという構造になっている。「運の定量感」の記述を除けば、このような物語における最大の共通項は「幸運」を得たことを元に語られている点であると言えるだろう。最も多く描かれていたのは「運の減少感」（研究2）というネガティブな展開であった。しかしながら、「運の残存感」や「運の増量感」（研究3）のようなポジティブな展開であっても、題材とされていたのはどれも同じで「幸運」を得たことであった。

では、同じように「幸運」を得ても、このように差異が生じる理由は何だろうか。これを物語の構造に求めると、「運の減少感」記述の多くが、予測は含むが実際のオチ（結末）がない記述になっていることに気づく。つまりは最終的に結果がどうなったかについては語られていないのである。

予測としてのオチが暗示されている「運の減少感」の記述と異なり、ポジティブな「運資源物語」があるとなれば、この時点で完結したハッピーエンドの展開が述べられているものであると言えるだろう。

ただ「残っていた運」や「残しておいた運」が述べられる場合でも、残存していることに「気付いた」だけであって、ここで得た「幸運」のために、「運が減少している」可能性がない訳ではない。このことは単に、未来の事象に対して意識が向いていないことを示している、あるいは予測自体がカットされているだけなのかもしれない。

未来が述べられない物語がポジティブなものであることは、谷本（1998）が恋愛に関する記事の構造から示したことと共通する。谷本はリクール（Ricoeur, 1983/1987）の物語論を援用して、物語における結末

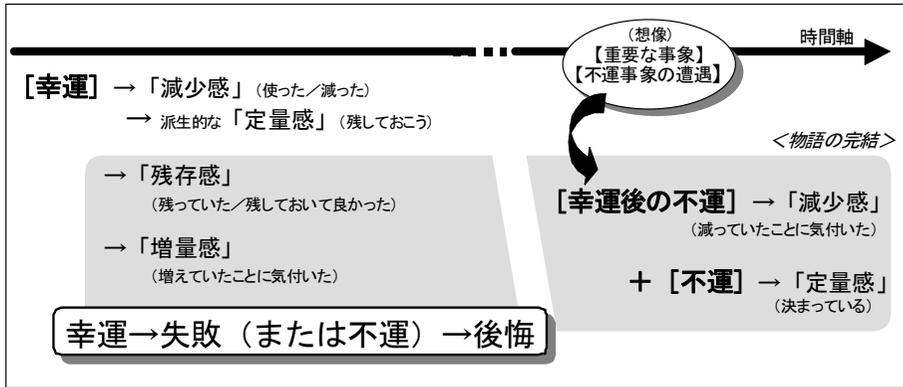


図3 「運資源」物語の時間軸と構造

の重要性を挙げている。これを踏まえて考えれば、「運資源物語」の結末は、未来について意識することで、やはりネガティブに収束する可能性が高いのではないかと考えられる。

つまり、物語におけるポジティブ→ネガティブという観点の違いは、過去の結果だけが述べられているのか、それとも未来の事象を含めて述べられているのかという、時間的な視点の持ち方によって変化したものであると考えられる。未来の事象が想起された場合には、不安な状況として描かれるのである。「運資源」的な予測が立てられた未来はネガティブなのかもしれない。

このような理由から考えると、終わりの見えない人生の中間の時点で語られる「運資源物語」には、ネガティブなものが圧倒的に多いことも頷ける。あたかも「ハッピーエンドで完結するには人生まだ早い」かのように、得た「幸運」を喜び勇んで語るべき時期を選択しているのではないだろうが、「人生のオチは分からない」ということもまた事実である。だからこそ、大丈夫という描かれ方は少ないのではないかと考えられる。

また「運資源」的な価値観からは「終わりよければ全てよし」という言葉があるように、どのような結果を得たのかということ以上に、物事が生起する順序も重要であることが分かる。テイゲン (Teigen, 1999) は最終的な結果を変化させると「幸運」の程度に対する判断が変化することから、物語の結末が「幸運」と

判断されるカギを握っていることを指摘している。本研究の事例では、このことは「幸運」そのものはポジティブなのに対して、物語全体ではネガティブな観点から描かれている部分に相当する。ネガティブ→ポジティブの順序で得た「幸運」よりも、ポジティブ→ネガティブという順序、つまり先にポジティブな結果を得た場合の「幸運」は後味が悪いのである。

まとめると、「運資源物語」は資源の枯渇というメタファーを中心に語られるネガティブな物語であると言えるだろう。

### 物語の面白さ——運資源物語の本質

以上に挙げられた「運資源物語」の特徴を見渡せば、「なぜこれほどまでに用いられるのか」という語りの頻度の側面と結び付けて、物語の面白さを浮き彫りにできると考えられる。

一つ目は「幸運」を得ることに対する妥当性という観点である。本研究の分類から、文脈によって「幸運」の受け止められ方は変化することが示唆された。そもそも、それ自体単独で「幸運」な結果を得ることは、ポジティブに価値付けされる可能性は高い。しかしながら、妥当な「幸運」と妥当でない「幸運」という価値付けがなされることで、妥当でない「幸運」を得ることは、後の重要な状況で失敗する原因になるとい、文脈上の理由からネガティブに捉えられるのである。

文脈上の妥当性を満たすには、時間的なタイミングと「幸運」の程度という両側面を兼ね備える必要があると考えられる。時間的なタイミングとは、「この時点で『幸運』を得ても良い」という時間的な位置である。また、「幸運」の程度とは、抱えきれないほど巨大でもなく、かといって取るに足らないほどつまらないものでもないという程度のことを指す。

つまりは、近い将来に訪れる可能性が高い、不確実でかつ重い意味を持つ事象が意識の範疇に入るような状況があるとする。このような状況では、妥当性の条件が満たされない。逆に言えば、文脈上の妥当性を満たすには「幸運」を得た時点で、とりあえず物語をポジティブに完結できる条件が整っていることが必要であると言えるだろう。

このような「幸運」の妥当性の観点から、記述で描かれているのは「幸運」そのものよりも、むしろ「幸運の使い方」であると言えるだろう。例えば、研究1の事例で見られたのは、ほとんどが「運の減少感」に関するものであった。この事例の中で記述者が用いているのは「減る」でなく「使う」という表現であった。「使う」という表現は「減る」という表現よりもおそらく能動的な側面を示していると考えられる。このことから、「使う」という本人の行動が、「運」の減少を促す主要な要因の一つとして捉えられているのではないかと推測される。本研究では取り上げなかったが、「悪運を落とす」という表現もある。この落としたり使ったりという行動がリアリティのない行為だとしても、能動的な行為であることは明白である。

地位や豊かさを得る場合には公正理念として努力が最重要視されたり（宮野，1998）、努力という言葉自体が好まれる（NHK 放送世論調査所，1984）など、日本では本質的に努力が好まれることは広く知られている。この意味で本人の行為は「幸運の使い方」であり、その行為自体を工夫することも、広い意味での努力に含まれると考えられる。もう少し例を挙げて説明すれば、研究3では「残しておく」という記述に対して、「残っているから大丈夫」という記述は、ほとんど見られなかった。この例のように、「幸運」自体は統制できなくても、ある程度「幸運の使い方」は自分の行為によって統制できるものとして捉えられているのではないかと考えられる。

藤村（1995）によれば、結果のいかんにかかわらず、努力して行動することが人として最低限取るべき態度（藤村は「努力主義の心性」と呼んでいる）だと、日本人の間では広く共有されていると指摘されている。このような態度を反映したものとして、自分の努力に見合っただけの「幸運」を得ることが分相応であると捉えられていると考えられる。つまり、努力の対価として「運やツキの正当化」がなされていると言えるのではないだろうか。

本来は得るべき結果ではなかった（が得た）「幸運」な結果に対して、時間と程度の両面で「幸運」を得ようとする妥当な努力を怠った過去の自分の行動が意識される場合がある。このような行動が「運」の無駄遣いや浪費と捉えられたり、また研究2のように違和感として描かれていると考えられるのである。

例えば、「努力していたら簡単に成功していただろう」と考える事象において、努力をせずに成功したような場合には、やはり妥当な「幸運」とは捉えられない。だからこそ妥当でない「幸運」からは、「運の減少」という結果としてネガティブな結末が予期される。そして実際にネガティブな結果を得た場合に、「運」の無駄遣いに対して後悔が起こるのである。

以上のことから、「運資源」物語の強調点は「幸運」にあるのではなく「幸運の使い方」、つまり心構えの強調にあると考えられる。

第二には、「幸運」の妥当性とも共通する点として、「運資源物語」は因果応報の物語だと考えることができる。これは人生において「運」の総量が決まっているという資源的なメタファーを反映したのものである。因果応報を好む背景として、先述の藤村（1995）が指摘する努力の下の平等が成り立つ社会構造にあることや、仏教などの宗教観との関連も考えられる。このような因果応報的な物語は、プロップ（Propp, 1958/1987）が分析した、まさに昔話の典型である。いわば、「幸運の平等観」が語られることも話の面白さの一つになっていると考えられる。

ただし因果の方向の多くは一方向的である。「不運」ばかりを得ているからといって、必ずしも「幸運」が来るように語られる訳ではない（逆はある）。また、他者が「幸運」ばかりを得ていると「見える」場合には、「運資源」の総量に個人差があるように描

かれる例も見られた(研究4)。

研究1で述べたように、「幸運」を得たことを喜ばなかったり、落ち着かなかったりという状態を招くことも、因果応報的に早くバランスの取れたネガティブな結末を欲している状態の反映とも言えるかもしれない。また「巨大な幸運」に対して生じる畏怖感も、見えない「巨大な不運」の予感が反映されたものと考えることができる。

因果応報観は、広く「運資源」メタファーの共有を支えている。本研究では、特に自己の経験に関する事例を中心に収集したが、中には他者の経験に対する解釈に「運資源」的な表現が用いられている例が見られた。他者が得た「幸運」に対して適当な誉め言葉を探すのは難しい。そこで「幸運」を得たことを伝える一つのコミュニケーション形態として、形式的で分かりやすいジョークである「運資源物語」は用いられているのではないかと考えられる。語る者だけでなく、語られた者から見ても因果応報という展開の方が納得しやすい説明ではないかと推測されるのである。

本研究で扱った事例を振り返ると、メディアから提示されているのは、ほとんどが「巨大な幸運」に対するコメントであった。しかし、そのような状況では他者(語る側)が過去に「運を貯めていた」のかどうかという行動は、不可視な部分であり、提示される側にとって妥当な「幸運」であるかどうかは判断しづらい。そこで「運の減少」というネガティブな側面の方が表面化しやすいのではないかと考えられる。

ここまで考えると、なぜ交互にポジティブ事象-ネガティブ事象が生起するように推測されやすいのか、すなわち「幸運」な出来事後に「不運」な出来事が予想され、あるいは逆に「不運」な出来事後に「幸運」な出来事が予想されるか、という問題にたどり着く。そこで、「運資源物語」の本質として、第三点目に偶然性の解釈と因果関係を説明する。

改めて述べれば、「運資源物語」は、事象の生起順に従った因果関係によって説明されていると考えられる。集められた記述には、単数の事象が記述されたもの、及び複数の事象が記述されたものの両者が見られたが、単数の事象の記述では結果に対する解釈と次の事象に対する予測が同時に含まれていた。また、複数の事象では両者の因果関係が語られており、事象間の

関係が独立しているとは捉えられていないことが分かる。

哲学者ヒューム(Hume)に倣って言うならば、原因帰属がなされて説明される多くの事象間の関係は、解釈的な要因を含む以上、100%明確な関連性があると言い切れるものはない。逆に考えれば、コーエン(Cohen, 1960)が「人間の心にはランダムさの考えは相容れない(p.42)」と述べるように、人は事象の独立性や偶然性を評価するのに鈍く、何らかの因果関係を説明することを好むとも言える。このように複数の事象を結ぶものとして意味が必要であり(やまだ, 2000)、大きな物語によって事象間は意味付けられ、因果関係は補完されている。

「運資源物語」で取り上げられるポジティブ-ネガティブという事象内容の交互性を考えれば、ギャンブラーの錯誤(Gambler's Fallacy)との共通性も考えられる。ギャンブラーの錯誤とはコインの裏表のように独立した事象であるにも関わらず、前の事象と異なる(あるいは逆の)結果を試行回数全体の蓋然性から判断するという、事象の生起可能性についてのバイアスのことである。「幸運」の後に不運が生じやすいというような「運資源」的な判断が複数の事象、あるいは人生という広い視点から捉えられており、それによって単一事象の生起可能性が判断されるといった視点の持ち方がギャンブラーの錯誤と共通する点である。さらにはギャンブラーの錯誤的な発想の反映として、各事象の生起確率が等価として捉えられていると考えられる。

ただし実際には「幸運」が生起する客観的確率は全ての事象間において等価ではなく、得られる「幸運」の程度もまた等価ではない。このような点などから、「幸運」の予測はコインの裏表のように単純ではない。

さらには予測される結果の方向性には偏りがあり、本研究の結果からはポジティブ→ネガティブの順序で語られる記述の方が、ネガティブ→ポジティブという順序のそれよりも遙かに多いのである。これは「運資源」的な判断には、単にギャンブラーの錯誤的な判断だけがなされているのではないことを示していると言えるだろう。

## まとめ

冒頭でも述べたように、「運資源」的な物語は「運資源ピリーフ」として、実際の因果判断や予測に用いられていると考えられる。いわば、システムとしてのしろうと理論である。

分相応な「幸運」を得たいという裏返し解釈から、努力した当然の帰結としての「幸運」は分相応なものとして捉えられていると考えられる。そのため、分相応ではない「幸運」は、素直に受け入れがたいものとして捉えられていると考えられる。「運資源ピリーフ」はそのような「幸運」に対しても用いることができるシステムとして、また、それは最も説明しやすいしろうと理論として、数多くの者に支持され、そして用いられているのではないかと考えられるのである。

## 注

- 1) ここでは、失敗が予期される場合に、結果が出た時の有力な理由付けとなるように、先に生じた結果がハンディキャップとなったと解釈されるべく、あらかじめ主張しておくことを指す。
- 2) もっとも研究1の事例6のように、人生全体を見回すのでなければ、「運の減少感」があっても、ポジティブに描かれる例もある。ただし、この場合でも「運の減少感」自体はポジティブとは言い難い。

## 引用文献

- 阿佐田哲也。(1986). ヤバ市ヤバ町雀鬼伝. 東京：講談社.
- 阿佐田哲也。(1989). 阿佐田哲也の競輪教科書. 東京：徳間書店.
- Bruner, J. S. (1999). 意味の復権——フォークサイコロジーに向けて (岡本夏木・仲渡一美・吉村恵子, 訳). 京都：ミネルヴァ書房. (Bruner, J. S. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge: Harvard University Press.)
- Caillouis, R. (1970). 遊びと人間 (清水幾太郎・霧生和夫, 訳). 東京：岩波書店. (Caillouis, R. (1958). *Les jeux et les hommes*. Paris: Gallimard.)
- (株) チャンスイット. (1999/01/05-2001/12/28). Chance It! メーリングサービス, <http://www.chance.com/>

(情報取得 1999/01/05-2001/12/28).

- Cohen, J. (1960). *Chance, skill, and luck: The psychology of guessing and gambling*. Harmondsworth: Penguin.
- 藤村正之。(1995). 生得：努力：偶然＝3：5：2——何が人生を決めるのか. 川崎賢一・芳賀学・小川博司 (編)・高橋勇悦 (監), 都市青年の意識と行動：若者たちの東京・神戸 90's・分析篇 (pp.191-212). 東京：恒星社厚生閣.
- Jones, E.E. & Davis, K.E. (1965). From acts to dispositions: The attribution processes in person perception. In Berkowitz, L. (Ed.) *Advances in experimental social psychology*. Vol.2. (pp.219-266). Orlando: Academic Press.
- 波多野秀行。(2001). LUNCH. ビッグコミックスピリッツ (2001/11/26号), 994, 259.
- Heider, F. (1978). 対人関係の心理学 (大橋正夫, 訳). 東京：誠信書房. (Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York: John Wiley & Sons.)
- ホイチョイ・プロダクションズ。(2002). 気まぐれコンセプト. ビッグコミックスピリッツ (2002/01/01号), 998, 176.
- 報知新聞。(2000/09/14). 「運をぼちぼち使いたい」兄弟も応援.
- Kahneman, D. & Tversky, A. (1982). The simulation heuristic. In Kahneman, D., Slovic, P., & Tversky, A. (Eds.) *Judgment under uncertainty: Heuristic and biases*. (pp.201-208). New York: Cambridge University Press.
- Kelley, H.H. (1967). Attribution Theory in Social Psychology. In Levine, D. (Ed.) *Nebraska Symposium on Motivation*, Vol.15. (pp.192-238). Lincoln: University of Nebraska Press.
- 宮野 勝。(1998). 価値観・社会認知・マクロ公正理念. 宮野勝 (編), 公平感と社会階層 1995年SSM調査シリーズ8 (pp.95-101). 東京：1995年SSM調査研究会.
- 村上幸史。(1995). 運に関する統制感の研究. 日本社会心理学会第36回大会発表論文集, 26-29.
- 村上幸史。(2002). 「運の強さ」とその認知的背景. 社会心理学研究, 18, 11-24.
- NHK放送世論調査所。(1984). データブック日本人の好きなもの. 東京：日本放送出版協会.
- 尾中文哉。(1990). 受験の昭和史——『螢雪時代』の投稿ユーモア欄の分析. ソシオロギス, 14, 131-145.
- 大出春江。(1989). 女性投稿欄にみる社会意識の変化——1953年から1986年までの「ひととき」質的分析の試み. 東京文化短期大学紀要, 8, 23-40.
- 大阪スポーツ。(2001/01/06). 二十歳のベスト・パール・ドレッサー賞.
- Propp, V. (1987). 昔話の形態学 (北岡誠司・福田美智代,

- 訳). 東京: 水声社. (Propp, V. (1958). *Morphology of the Folktale*. Bloomington: Indiana University.)
- Ricoeur, P. (1987). 時間と物語 I (久米博, 訳). 東京: 新曜社. (Ricoeur, P. (1983). *Temps et Recit* 1. Paris: Seuil.)
- Ross, L. (1977). The intuitive psychologist and his shortcomings: Distortions in attribution process. In Berkowitz L., (Ed.) *Advances in experimental social psychology*, Vol.10. (pp.61-79). Orlando: Academic Press.
- サンケイスポーツ. (1998/08/02). 新庄先制打も.
- サンケイスポーツ. (1999/11/15). オレは「トモチカ」だ.
- サンケイスポーツ. (2002/02/17). ALFEEに8900人熱狂.
- 谷本菜穂. (1998). 現代的恋愛の諸相——雑誌の言説における社会的物語. *社会学評論*, 49, 286-301.
- Teigen, K.H. (1995). How good is good luck? The role of counterfactual thinking in the perception of lucky and unlucky events. *European Journal of Social Psychology*, 25, 281-302.
- Teigen, K.H. (1999). Good luck and bad luck: How to tell the difference. *European Journal of Social Psychology*, 29, 981-1010.
- やまだようこ. (2000). 人生を物語ることの意味——ライフストーリーの心理学. やまだようこ (編著), 人生を物語る——生成のライフストーリー (pp.1-38). 京都: ミネルヴァ書房.

## 付記及び謝辞

本論文は日本心理学会第66回及び第67回大会の筆者の発表を元に加筆・再構成しました。

論文の内容や構成について、大阪大学人間科学部大坊郁夫教授にご指導いただきました。また本研究の調査分析に際して、本研究科大学院生の大橋明氏、小澤明子氏、金政祐司氏、岸本渉氏、山田歩氏(50音順、所属は分析当時)に協力をお願いしました。ここに感謝を申し上げます。

(2003.6.26 受稿, 2004.11.16 受理)